平成26年度　西部地域療育センター連続講座（平成26年7月4日）
ライフステージを見通した支援とは －成人期の発達障害から見えてくるもの－

名古屋市発達障害者支援センター　浅井　朋子所長（小児科医）

はじめに

ただいまご紹介いただきました浅井と申します。発達障害者支援センター長の仕事をしながら、中央療育センターで、乳幼児から18歳までの発達障害の診断とフォローをしています。名市大の外来の仕事もしていますので、大学を卒業したり、就職したりしている患者さんも診ています。支援センターで相談があるのは、半分以上が成人です。幼児期の相談は、地域療育センターでしっかりとやっていただいているので少ないのですが、小学校、中学校、高校、大学となるにしたがって、支援の場が少なくなってくるので、特に成人は相談が多いです。

相談を通じて感じることは、「発達障害特性というものは生涯続くもので、どこかで、すっかりよくなって問題がまったくなくなるものではない」ということです。適応のよい子は、困った状況においてもそれなりに乗り越えていけるようになるのですが、「就労」となると、言われたことをきちんとやるという受身の能力だけでなく、「自分で考えて動く」ことが求められるようになり、そこで問題が出てくることがあります。したがって、幼児期だけでなくそれぞれのライフステージで色々な支援が必要だと思います。物語であれば、波乱万丈があったものの、最後は「めでたしめでたし」で終わります。

しかし実際の人生では、定型発達であっても色々な問題を乗り越えて「めでたしめでたし」となった後も、課題が次々と出てきて、死ぬまで色々な課題に直面して、それに対峙して乗り越えていくことの繰り返しです。そうであれば、発達障害の特性を持っている方々にも幼児期だけでなく、「ライフステージを通した支援」が必要なのだと思っています。

どのような将来像をイメージするか

診療をしていて、よくお母様方から聞かれることは、「将来普通の生活ができますか」、「大人になった時に自立できますか」ということです。初診の時に聞かれるお母様もいれば、しばらくたって、色々

なことが聞けるようになった時に聞かれる方もみえます。そこで、今日は、発達障害のある子について「どのような将来像を描けばよいか」「成人期に向けてどのような準備をしたらよいか」、さらに「小・中学生時代に意識しておくとよいこと」についてお話したいと思います。

「普通の生活」「自立した生活」という言葉からどのようなイメージを持たれるでしょうか？「誰にも助けてもらわずに自分の力だけで生活すること」、「就職して自分で稼いだお金だけで生活できること」でしょうか。「結婚して家庭、家族が持てること」でしょうか。人の数だけイメージが違うと思います。翻って考えると「誰にも支えられずに生活している人」はいるでしょうか。自分は誰にも支えられたり、助けられたりしていないという人がいたとしたら、それは周りが見えていない人かなと思います。どんな人もお互いに支えられたり、助けられたりしているのではないでしょうか。「支援を受けていても自立した生活はある」ということから出発することが大事だと思います。

それでは、発達障害の人は「将来何を目指すのか」「何がゴールなのか」。特性というものは根本的にはなくならないので、発達促進や定型発達児と同様な能力を獲得することではなく、穏やかで、その人らしく力を発揮したり、人生を楽しめる力をつけること、発達障害という特性が持つマイナスの影響があるとすれば、それを最小限に抑えて、その人らしく成長・発達する。「発達障害としての順当な育ち」を目標にするのが妥当ではないかと思います。そのためには、「個人の努力で獲得できるもの」と「サポートを受けとる力をつけることで足りない部分を補うもの」を区別することが大切です。全て自分の努力で対応しようとすれば、あまりにも道のりが遠くて、無力感に捉えられてしまいます。「適切にサポートを受け取る」ということも大事な能力の一つです。

成人期に向けてどのような準備をしたらよいか

就労の相談に訪れたケースの中には、就労以前に解決しなければならない様々な課題があることが多いです。「**就労準備性**（就労するために必要な能力）」が確立していない例としては、「昼夜逆転など生活リズムが確立されていない」ことが多いです。完全な昼夜逆転ではなくても、遅くまで起きて、翌朝遅刻するように、基本的なことが自分でコントロールできない。それから、「働くことの意味がわかっていない」。経験もなく、具体的なイメージが持てていない。また「基本的な生活スキルが獲得されておらず、生活の自立度が低く、親への依存度が高い」状態では、仕事までは持っていけない。「精神的に不安定な状況で、精神科的な治療が必要」なレベルの方もいます。うつなどの二次障害的なことが起こっていると、その治療を優先して状況が落ち着かないと次のステップに進めない。色々なケースがあります。

「**就労準備性**」には、就労に対する一定の意識、スキルが含まれます。就労準備性を身につけるポイントとは「基本的な生活スキル、対人スキルが身についている」「自分自身について理解している」「他者からのサポートを受け取る力を持っている」「家族に心の余裕があり、子どもへの価値観の強要がない」「家族以外にも信頼できる相談相手を持っている」「何のために働くのかについて具体的なイメージが持てている」「好きなこと、楽しめることを持っている」です。それぞれについて、具体的に話をしていきたいと思います。

「**基本的な生活スキル**」。日常のさまざまな問題や要求に対して、適切に対処するために必要な能力のことです。まず、ソーシャルスキルよりもライフスキルです。非常に基本的なことですが、「決まった時間に一人で起きる」、家族が叩き起して何とか起きるということではなくて、自分で目覚ましを設定して起きるということです。次に、「食事を用意して食べる」。自分で調理までできれば一番よいですが、そこまで出来なくても、例えばコンビニに行って食事にふさわしいメニューを選択できるということです。お母さんに「夕飯のおかずを買ってきて」と言われて、みたらしだんごを買ってきたというケースがあったのですが、主食・副食といった、バランスのとれた食事の常識が身に付いていることが大事です。

洗面などの清潔習慣も具体的に教えて、身につけてもらう必要があります。就労相談のケースでも、服装はそれなりの格好をしているものの、爪などが汚くて、会社の同僚などにも嫌われそうな印象を受けることがあります。「適切な服を選んで着替える」、一応スーツを着ているもののしわくちゃだったり、シャツが汚れたまま、臭いがするといったケースがあります。「洗濯を定期的にする」、毎日洗濯する必要はありませんが、どの程度のローテーションであ

れば、きれいな服装でいられるか。それらについて具体的に教えていく必要があります。

「遅刻をしない」「次の日に備えて就寝時間を考慮できる」。翌朝早いのに、眠れなくて、ゲームをやっているうちに徹夜になって、それを繰り返す中で遅刻が増えて、結局、転職や離職をせざるを得ないように追い込まれることもあります。「金銭管理」も大切です。一般就労で頑張って働いていたのですが、職場で細かな指摘を受け続けてきた結果、ストレス発散するためにパチンコに凝ってしまい、一日どれだけ負けても２万円までと本人なりに決めていたものの、月に何回までと決めていなかったので、給料を使い果たしてしまったなど、金銭管理ができていそうで、できていないケースがあったりします。「体調管理」についても、自分の状況に気づくことが苦手、セルフモニタリングが弱いところがあるので、疲れていることに気がつかず、めいっぱいやって倒れてしまう。「もうどうにも起き上がれなくて突然休みます」というまで頑張るよりも、適度に頑張って、継続できる方が職場からは信頼されます。

「**基本的な対人スキル**」。日常生活を大きなトラブルなく過ごすために必要なコミュニケーションの能力のことです。駆け引きができなくても、感じがよい人であればうまくいく、それには最低限何が必要かと考えればよいと思います。人間関係を円滑にする言葉、「すみません」「ありがとうございます」。こういった挨拶がきちんとできること。相手の話を最後まで聞く。途中で違うと思っても反論せず、まず聞くことができると、ずいぶん相手の受ける印象もよいはずです。また、わからないことをそのままにしないで、質問することができると大きな失敗につながらない。最低限のエチケットやマナーを意識した行動がとれることは、対人関係を上手く進める上で大切です。

「**自分自身について理解すること**」。自己理解です。哲学のような難しいことではなく、「自分は何が好きで、何が嫌いなのか」、「何が得意なのか、苦手なのか」、「どういうことが起こると腹が立ってしまって、余裕がなくなってしまうのか」、「どうしたら落ち着くのか、リラックスできるのか」。また、「困るとはどういう状態のことなのか」。中学生ぐらいの子でも「困る」という言葉を知ってはいるものの、それを自分にあてはめた場合に、具体的にイメージできない。初診の時に「困っていることは？」と聞くと、「特に困っていません」と答えるので、そばにいたお母さんが「いつもあなたこういうことで怒っているじゃない」と言うと「ああ。それはそうなんだよ」と答えます。「それが困っているという事なんだよ」と説明すると、「そうなんだ」と理解するといったことがあります。

それから、「疲れている」ことや自分の体調の変化を、どれぐらい把握できるか。例えば「暑いとイライラする」とか「暑さに弱くて集中が途切れる」ことがわかっているとそれなりの対処ができます。「自分の取扱説明書を分かっている」人は強いので、それに気づいて貰うことが大事です。

「**他者からサポートを受け取る力**」。「支援を受けることが自分にとって役立つ、それによって上手くやれる」という実感を持っているとすごく強いです。支援を受けることが「負け」という認識にならない。「自分だけ特別扱いされてはだめだ」と思ってしまう子は、大人になった時の選択肢が狭くなって、身動きが取れなくなることがあります。「苦手なことがあることを認め、それを補う工夫ができる」「何を助けてもらえば出来るのかを分かっていて伝えられる」。こういったことが出来ると社会でやっていく時に強みになります。同時に複数のことを処理することが苦手で、自動車の免許取得と就職活動が重なった時に、何度も免許の試験に落ちて、免許が取

れなかったまま就職した青年が、理解のある上司に「２週間の休暇やるから取ってこい」と言われ、それだけに集中して免許を取得したというケースがあります。指示を聞く時に、聞きながらメモを取ることができないため、「メモをとる間は待っていて、書き終わってから次の指示をもらえないか」と上司にお願いし、認めてくれた例もあります。「何が苦手でどういった支援があればできるのか」わかっていると、上手く対応できることが増えると思います。

このためには、小さい頃から「サポートを受けると上手くいく」経験をさせてあげることが必要です。親や教師は「大人になってからのことを考えると、一人でできるように、手助けしないほうがよいのではないか」と考えるかもしれませんが、他人からのサポートで上手くいく体験があると、相手に対する信頼感やアドバイスを受け入れる力が育っていく。「ここまでできたのだから、ここからは一人でやってみたら」というように徐々にできることを増やしていく。「相手が自分に対して役に立つことを言ってくれる」という関係を作る。「支援を受けたら自分の力でやったのではないので価値が下がる」と捉えずに、「助けてもらったけれど、何とか自分でできるんだ、自分で乗り越えられたんだ」という自信を持たせることが大切です。自分が「告知」を受けた時も、「適切なサポートがあれば、自分は、今まで何とかやれてきた」と理解していると、急に投げやりになったりしないと思います。

「**子どもへの価値観の強要がない**」。これも肝心です。定型発達の子も、中学受験をするか否か、高校、大学、就職と選択の連続ですが、発達障害がある子は、人生のかなり早い段階で選択を迫られることが多いと思います。まず「幼稚園に行くのか、保育園にいくのか、療育センターの通園にいくのか」から始まり、小学校に上がる時には「通常級なのか、支援級なのか」、就労する時には「一般就労なのか、障害者就労なのか」。その時に狭い価値観を持っていると、どんどん選択肢がなくなっていきます。これは、親の人生観、ご両親がどう考えているかの影響がすごくあります。定型発達児のような一般的なロールモデルをイメージしにくいので、できれば上手くいっている発達障害のある人の例を知っていると、価値観が広く持てるのではないかと思います。オーダーメイドの成人期のイメージが必要ですし、多様な価値観を持っていると選択肢が多くなります。

大学、大学院を卒業した知的に高い方でも、一般就労が難しい人はいます。有名な大学であれば「この大学を出ているのなら、これぐらいのことはできて当然」という期待水準で企業は見るので、それにあてはまらなければ「使えない」となってしまいます。今の時代、社会全体に余裕がなくなっていて、一人の人に「ゼネラリスト」としての色々な能力が要求されます。専門職でその仕事だけをやっていれば、他はサポートしてもらえるという職業は少なくなって、交渉もできて、他の人とチームを組んでやれる人が求められるので、特定の仕事だけしかできないとなると「障害者就労」の形をとらないと難しい場合があります。その時に、親も本人も「こんないい大学を出ているのに、どうして障害者就労なんだ、とても容認できない」と考えて、就職・転職を繰り返し、最終的に家に籠ってしまう例もあります。価値観を広く持てれば、選択肢も拡がります。

小学校に上がる時に、通常級か支援級か微妙なお子さんは、たいてい通常級を選ばれます。知的障害があっても「色々な子との交流をさせたい」などの理由で、通常級を選ばれる場合があります。この時に、子どもには絶対、「頑張らないと支援級に行かなくちゃいけなくなるよ」という言い方はしないようにお願いしています。それは「通常級以外は頑張っていない子が行くところだ」という印象を与えることになります。お子さんが高学年になった時に、子どもが「自分の行くところではない」と思ってしまっていて、本当は支援級に行ったほうがよくても実現しないということになります。親の価値観というものは子どもに強く影響を与えるので、自由な発想ができるように配慮してほしいと思います。

「**家族以外にも相談できる人がいる**」。他者との信頼関係、心の拠り所はたくさんあったほうがいいです。家族には、家族だけの文化というものがあるので、別の視点が持ちにくいのですが、客観的な視点が持てます。子どもが成長すれば親も年をとるので、親の病気、加齢などにも対処しなくてはいけません。支える人が家族以外にもいることが安定につながります。

「**働くということのイメージが持てている**」。これはまず何のために働くのか、具体的なイメージを持つことができることです。働くのは「生活のため」「お金がないと暮らしていけない」などですが、子

どもは「生活のため」ということがなかなかイメージできないので、「お金を稼がないと自分の好きなことができない」という発想が持てていないと、「そんな面倒なことは嫌だ」ということになります。

次に会社で働くということについての具体的なイメージを持てること。「やりたい仕事だけがやれる」恵まれた職場はなくて、「仕事は様々な要素から成り立っていて、好きなことだけではなく、他の雑用や最低限の人付き合いもやらなければならない」ことをわかっているということです。「将来ラーメン屋になりたい」とお母さんに言った子がいました。普通、非現実的なことを言っていると、それを否定するようなことを言ったり、聞き流すことが多いと思いますが、そのお母さんは「本当にラーメン屋になるなら、どんなことをしなくてはいけないのか研究してみよう」と、近所のラーメン屋さんに何度も食べに行って親しくなり、夏休みに店の仕事を手伝わせて貰いました。ラーメン屋をやるということは、ラーメンを作るだけでなく、お客さんに応対したり、洗い物もしたり、厨房を掃除したり、店やトイレの掃除もしなければいけないということを実際に経験させたわけです。働くというイメージを具体化する中で、興味も拡がり、現実検討する力もつき「ものづくりに関われる高校に行きたい」と工業系の高校に進学し、学校推薦で有名な会社に一般就労で就職したということがあります。子どもの言ったことを一笑に付すのではなく、実現させるにはどうすればよいかを考えて、「体験させて、実際働くということのイメージを上手に持たせていく」、その過程で現実検討していく力をつけていくということが重要だと思います。

「**楽しめること、好きなことを持っている**」。得意なことを見つけることは難しいかもしれませんが、「好きなこと、楽しめること」は見つけやすいと思います。それがあれば精神的な安定に役立ちますし、嫌なことを乗り越えるためのモチベーションになります。水泳が上手になって、泳げばすっきりすることが分かるようになって、かつてはパニックになるような場面であっても、「いらいらするからちょっと泳いでくる」と気分を変えてくることができるようになった子がいます。毎週末にウォーキング大会に参加することが楽しみで、泊まりがけで計画を立てて行くようにもなって、苦戦していた高校生活を乗り越えた子もいます。ひとりカラオケやバスケットボールをやっている子もいます。

小・中学校時代に身につけておくこと

定型発達児では、幼児期に家族から基本的な生活動作、習慣を教えられ、その後はあえて教えなくても、自然に生活スキルを身につけていきます。小学生でしたら「時間、スケジュールを意識した行動」「持ち物の管理、清潔習慣などの自己管理」ができ、「他者視線を意識するようになり、大人の価値観を内在化」し、「自分で計画を立てたり、決めることを要求するようになるという自律性が芽生える」ことになります。中学生になると、さらに洗練され「社会規範、常識と照らし合わせて自分の行動を意識して、コントロールできる」ようになります。

発達障害児の場合は、食事、着替えなどの比較的シンプルなスキルは幼児期に身に付いていくのですが、「年齢に合わせた振る舞い方」が自然に身につかず、意識的に教えないと、小さい時と同じように振る舞うということが起こってきます。また、ひとつひとつの行為のスキルは獲得していても、「段取りが苦手」だったり「実行機能の問題」があって、例えば、ご飯を食べて、着替えて、歯を磨くことを「一定時間内に効率よく行う」ことが出来ない、ということがあります。

小・中学時代にどこまでの**生活スキル**を身につけるか。最低限、「持ち物の管理」、「学校の準備」、「清潔習慣」、「時間、スケジュールの管理」、「金銭管理（いわゆるお小遣いの管理）」、これぐらいのことは身につけてほしいと思います。低学年の間は、親が口やかましく言えばいいかもしれませんが、高学年になれば、自律的・自主的に動くようにするにはどうすればよいかということになってきます。親が一方的に決めるのではなく、子どもに選択できるようにします。例えば、下校後のスケジュールをどう考えるかという場合に、子どもにすべて決めさせようとしても上手くいきません。食事の時間、お風呂の時間や就寝時間などは子どもが勝手に決めていいものではなく、大人が決める必要があります。それ以外の時間をどのように使うか、つまり宿題はいつやるのか、友達と遊ぶのはいつにするのか、テレビはいつ見るのか、ゲームをするのはいつにするのかといったことを子どもに決めさせてみるのです。やらせてみると、始めから破たんしているようなスケジュールを立てることも多いですが、「こんなものは絶対

無理」と言わずに、本当にできるかどうか試させて、記録を取って、できないときは「どこをどう変えればいいか」と試行錯誤をさせてみるのです。その過程で「このやり方では上手くいかない」と自分で気づくという現実検討の力をつけることに繋がりますし、「自分で決めたことは自分で何とかしよう」という自律性を養うことにも繋がります。このためには良好な親子関係も作っておかなければなりません。幼児期のゲームでもどこかで区切りをつける、「一日これだけ」というルールを作って身につけておくことで、初めてここに繋がると思います。

「**身につけることが難しい生活スキル**」もあります。現実の生活においては色々なトラブルが生じますが、それに対処できるのか。「体調管理」や「ストレスコントロール」や「物事の優先順位をつけること」は、生活する上で重要なスキルなのですが、誰もが身につけられるかと言うと、そうではないです。ここが、先ほどお話した「他の人からサポートを受けとる」ところです。「どうすればよいか」について、大人になってからも相談できる人がいると、なんとかなります。トラブルも「自分で全部対処しようとする」のではなくて、困った時に「誰に相談するか」という相談先が決まっていればなんとかなります。体調管理でも「自分がこんなふうになっていたら、気をつけなければいけない」ということがわかっていると、予防的に対処がとれる。よくわからないときは「一時間仕事をしたら強制的に休憩を入れる」などの方法を、客観的に自分のことを知っている人と相談して決めることも可能です。全部自分で対処できるように頑張らせるよりも、「これは自分でやる、これ以上はサポートを受ける」と、分けて考えると対処しやすいのではないでしょうか。

「**家庭で何をするか**」ということでは、まずは「お手伝い」です。「家族の一員としての義務、役割」を意識させることが、「社会の一員としての義務、役割の理解」に繋がっていきます。簡単なお手伝いから開始して、完全に任せられるレベルまでスキルアップすることが重要です。完全にできるようにすることで、親としても助かるし、心からお礼も言えることになります。「家族と一緒にボランティア活動してみる」こともよいです。小学校になると自分の子どもが他の人とやり取りしている場面を見ることができる機会が少なくなるので、「どんなことで困るのか」、「どんな失敗があるのか」を見ることができます。またボランティアは大人や高齢の方が多いので、子どもが頑張っていると失敗してもフォローしてくれたり、ほめてくれたりポジティブな反応が得られるのでよいと思います。

小・中学校時代に身につけるといい「**対人スキル**」は、「挨拶ができる」「丁寧な言葉で話す」「最低限のエチケット、マナーを守れる」「わからないことを質問できる」です。丁寧すぎる、とか、相手によって使い分けができない、ということもあるかもしれません。

最初から完璧を目指すのではなく、例えば、どんな場合でも丁寧な話し方をすれば、からかわれることもあるかもしれませんが、そんな時は大人が関与すればよい訳で、丁寧に話して将来トラブルになることはないので、「ベストではないがベター」というスタンスで身につけておくとよいのではないでしょうか。

「**身につけることが難しい対人スキル**」は「相手の状況に合わせて臨機応変な対応をすること」です。「雑談をすること」「上手に断ること」「話し合って合意に達すること」「グループで付き合うこと」などはやはり苦手です。就労している成人期の発達障害の相談で、昼休みに何を雑談すればいいかわからなくて、用もないのに外に出たり、夜の飲み会もどの程度付き合ったらよいか分からず、全部付き合って疲れて遅刻が増えたり、断り方も上手ではなく、嘘もつけないので「見たいテレビがあるから」と断って、「変な人」とレッテルをはられるなど「場にあった上手な付き合い方がで

きない」ということがあります。これも、全部自分でできなくても、相談できる人がいれば、断り方のパターンを教えてもらうなどができるはずです。サポートを受け取る力を持っていれば乗り切れることなのです。

「**家庭では何をするか**」。「どうぞ」「ありがとう」「すみません」など人間関係をスムーズにする言葉を実際の生活場面で、大人が実践することが必要です。また、「年齢に合ったエチケット、マナーにバージョンアップさせていく」ことです。幼稚園では許されたことが小学校高学年では許されないということもあるので、二人称、三人称の視点に気付かせることが必要です。「ソーシャルストーリー」というものがあるのですが、そこでは「大多数の人は」「一般の人は」ということを使います。「三人称」の視点ですね。「君はそうは思わないかもしれないが、大多数の人はこう思うので、このようにやっていくと上手くいくよ」ということをいかに気付いてもらえるかということです。

「**安定した成人期に向けて**」改めてまとめますと、大きく3項目あります。一つめは「精神的に安定していること」。具体的に言うと「人との信頼関係が築けること」「自己効用感を持てること」です。自分はできないこともあるけれど、助けてもらったり、相談することでなんとかなると理解する。自分は何でもやれる、という根拠のない自信は社会で通用しません。「苦手なこともあるが、そのことを分かっていて、その解決方法も知っている」ことが自己効用感になっていきます。小さい時から「人と信頼関係が持てる、安心して人に相談できて、相談することが役に立つ」という感覚を持たせることがよいと思います。「大人になったら何でも自分ひとりでやらなければならない」と考えて、自立させるために支援を急にやめてしまったりすることはかえってマイナスとなります。

二つめは、「自律性、自分をコントロールする力をつけていく」ことです。そのためには自分自身を知る、自己理解が大事です。大人の判断を押し付けないことも必要です。働くということはどういうことかにも通じますが、「何になりたい？」と発達障害の中・高生に聞くと、「ゲームデザイナー」や「声優」になりたいという子が多いのですが、頭ごなしに無理と決め付けるのではなく、「どんな資格がいるか」「どんな学校に行けばいいのか」「その学校はどこにあるのか」「東京にしかないのなら一人暮らしができるのか」、「卒業するまでにいくらかかるのか」「我が家の家計でその費用が捻出できるのか」、「卒業生のうち何人ぐらいが実際に就職して活躍できているのか」を実際調べてみることが大切です。イメージすることが苦手な人たちなので、シミュレーションを一緒にやって、「具体化」させます。例えば一人暮らしができるのかについては、「洗濯を定期的にして清潔な服装ができるのか」、「人に起こされなくても目覚ましを自分でセットして起きることができるのか」、「食事を規則正しく摂れるのか」、「掃除を定期的にできるのか」等の一人暮らしに必要なスキルがどの程度身についているのかを一定期間やってみることです。自分自身の現在の力を客観的に見てみることで、現実的なところに着地することができます。

最後に「社会的な振る舞いができること」です。これは定型発達者の社会性のレベルまで求めているのではありません。具体的には「他者の存在に気付くこと」、「自分とは異なる見方をする人がいることに気付くこと＝三人称の視点を持てること」、「社会的なルールを守れること」です。要するに「合意形成」ができることです。大人からの指示待ちではなく、子どもの主張を一方的に受け入れるのでもなく、子どもの言い分も聞きつつ大人としての判断も提案もして、何とか折り合える着地点を見つけて行くことが合意となります。これも小さなうちから意識的に積み上げていかなければ難しい。小学校低学年ではまだ一人称の視点しか持てず、「自分が」しかなくて、大人が「駄目だよ」と言ってもパニックになるだけかもしれません。まず、大人が子どもにとって合意しやすいものから提案して、「やってみたらできた」体験をすると、自分でやると決めたことは、守ろうとします。達成感も持てるようになるし、自分が上手くいくような提案をしてくれた相手にも信頼感も育ってきます。それをバージョンアップしていくことを考えていけば良いと思います。これも、小さいうちからやることが必要で、中学生になってから急に基礎ができていないところからやろうとしてもうまくいきません。小さなお子さんに関わる支援者の方が、お母さん方にアドバイスする中で、目先の問題点を解決する必要も、もちろんありますが、「将来的に必要となることへの長期的な視点を持って今の状態を評価し、今やるべきことは何かをアドバイスすることが重要だと思います。

平成26年度 西部地域療育センター連続講座のご案内

第3回　講演会

幼児期の発達を支援するために ～それぞれの立場から～

日　時　　平成26年12月5日（金）　午後3時30分～5時
会　場　　西部地域療育センター1階　多目的ホール
対　象　　保育園、幼稚園、小学校、療育施設、関係機関の職員のかた

～ 内 容 ・ 講 師 ～

「診断分類に関する最近の動向」

西部地域療育センター　所長　鷲見　聡（小児科医）

発達障害の診断分類について、これまでにも混乱がありましたが、米国精神医学会が新分類を提案したことにより、更なる混乱が危惧されています。例えば、広汎性発達障害という分類は今後使われなくなると予測されています。診断分類に振り回されないようにするために、最近の動向について解説します。

「ことばを育てるための支援」

西部地域療育センター　言語聴覚士　玉川　省子

保育園・幼稚園にはいろいろな発達段階のお子さんがいます。中にはことばの遅れのあるお子さんもいます。保護者の方のことばへの心配・不安は強く、ともすると訓練方向に走りがちです。しかし、ことばは元来、子どもの日々の生活の中で育まれていくものです。今回は子どものことばの発達について理解を深め、集団の場面でことばをどのように育てていくのかを考えてみたいと思います。

「運動発達への支援」

西部地域療育センター　理学療法士　永田　篤司

近年、少子化、気候の温暖化、遊び場の制限など生活環境が変化している中、筋力低下、平衡感覚異常などにより、不器用な子どもが増加していると思われます。幼少期にしっかり体を動かす事が学童期～大人への成長の基礎となります。この土台作りの大事な時期に何をしたら良いかをお伝えしたいと思います。

ボランティア募集

保育場面での手助け（室内の活動、園外への散歩など）
教材づくり
保護者活動時における療育児のきょうだいの保育
センター行事（運動会、夏祭りなど）のお手伝い
その他、園の環境整備など

■お問合せ・お申込み■
名古屋市西部地域療育センター

名古屋市西部地域療育センターだより　第31号
発　行　日　2014年10月
編集・発行　**名古屋市西部地域療育センター**
〒454-0828　名古屋市中川区小本一丁目20-48
Tel.（052）361-9555　Fax.（052）361-9560

この機関紙は古紙パルプを含む再生紙を使用しています。